

# 辺陲線上

——其の二——

(辺陲とは辺境の地を指す)

原作 駱賓基  
翻訳 岡本不二明

## (第6章)

ここ何日かの間に、劉強<sup>リウチアン</sup>は次第に痩せてきた。彼が相当くさっていたことは確かだ。すぐそばに近づいてみれば、誰でも彼のぼんやりした目つきからそれが分かった。彼はちよくちよく高粱酒<sup>コウリヤン</sup>を飲むと、一日中ぼんやりと過ごした。そんなことでは、他の人間におかしな奴だと思われても不思議はなかった。むろん彼自身も、このままではズルズルと墮落してゆきそうなことは承知していたが。

「ヘッ！ 何が義勇軍だ！」今日も彼は、いつものようにブツブツ不満をもらしながら、酒杯をあおっていた。「まちがいなく烏合<sup>ウカウ</sup>の群盗匪賊だ。やぐざな飢えた狼どもめ……」

彼はひとりで室内をうろつきながら、神経をいらだたせていた。こちらの隅からあちらの隅へと、まるで汚い池に投げ込まれたおけらのように、回り続けた。

「あーあ！ うかつだった。まったくこんなにかつとは、自分ながら信

じられない」彼は頭を振りながら、ブツブツと独り言をつぶやいた。「沙坪<sup>シャピン</sup>鎮へ逃げていれば、もっとよかつたろうに！ あそこにや、級友も先生もいる……。ああッ、俺はまのぬけた熊だ」彼は目を伏せて、地面を見つめた。土間には、葦草がいっぱい敷かれていた。彼はゆつくりとまた視線を酒杯に移し、珠玉にも似た酒のしずくが、その中でコロコロいつまでも動いているのをぼんやり眺めていた。一口すすると、改めてまたゆつくりと歩きたした。

「これも運命なのか？——かりに運命というのが本当になればの話だが、俺は必ず……。ああッ！ 余りに俺を愚弄している。」

しかし最後に、彼はみずから慰めを見出した。

「崖っ淵に立たされた時に、救いの船のよしあしなど、どうでもいいじゃないか。だからこそ俺は、こうして葦子溝<sup>ウェイツコウ</sup>の苦難の群れに身を投じたはずだ」

手足の腫れは、ようやく癒えつつあった。だが、むしろ頭のほうが粉々に砕けるような痛みを覚えていた。彼は頭をさすり、体を横たえた。何枚かの厚い板をつなぎあわせたベッドは、体を動かすとギシギシ音をたてた。彼は寝返りをうち、土壁をじっと凝視した。まるでその土壁が答えを与えてくれるのを期待するかのように。

むかだが蜘蛛の一隅にひっかかり、触覚の髭を上下に動かしていた。彼はぼんやりとこの微小な生物の動きを見つめ、虫の音に耳を傾けた。

「ふーっ！」彼は思いをこめて、ためいきをついた。

彼はまた、斜めに掛かっている歩兵銃に目をやった。

「四丁の猟銃が一丁の歩兵銃に化けたか……」彼は手を伸ばして銃床を手元に引き寄せた。口許をほころばせ微笑をもらした。

まず弾倉を引っ張り弾丸をとり、三つ重ねて……ふたたびピンを締めると、彼は銃を食卓の下に向け、片目で狙いをつけた……。

「おいッ！」丸い頬髭を生やした老于ラオイウが合図した。

「どうした？」

「起きな！一大事だ。早く！」のつべりした黒い顔に、緊張の色が浮かんでいた。

「まっ昼間から何だい？」劉強はいぶかしみながら、前に這っていった。

「ジャン……ジャン……」外から銅鑼どらの音が伝わってきた。

銅鑼のその震えるような音は、夜間勤務班の連中の昼寝を打ち破ってしまった。

「おお！……」さきほどまでの劉強の苦悩は、たちまち消し飛んでしまった。その音は全員集合の合図だったからだ。

「早くあなたの銃を貸してくれ。他の図々しい連中も、借りたがっているんだ」彼は、そのがさつな顔つき同様、乱暴な口調で言った。

「何を言うんだ？この銃は俺のものなんだ」劉強は体を起こした。

「あんたはまだヒョッコだから、いざ戦闘となりやあ縮みあがってしまうさ。わしが持つていくつてば。帰ってきたら、上等の地下足袋を進呈するかさ」彼はもう持ち主の許しを得たかのように、銃を勝手にひったくると、

走り出ていってしまった。

「俺の……」劉強もあわてて追いかけた。

中庭に集まった連中は、まるで穴から這いできた蟻のようだった。真ん中に囲んでいたのが、司令だった。彼らは、相変わらず木でも切り出しにゆく時のように、何の規律性もなくてんでに勝手な恰好で、集まってきた。

「司令」とはいつても、要するに手配師あがりの李リのことであった。

「みんな！」彼の語調は朗らかだった。「情報が入ったぞ！」

「何のことだ？……」取り囲んでいる連中が、ワイワイ言いあった。

「沙坨子鎮シャツォツチンの日本軍が、明月洞ミンゲトウの朝鮮抗日義勇軍を襲撃しに出た」李司令の頬骨の突き出た顔に、重々しい表情が浮かんだ。「やつらが長驅している隙に、俺たちは沙坨子鎮を攻めるのだ」

「よしッ……」老于是頬の丸い髭をひねった。

「みんな！上等の足袋をいただけるチャンスだぞ」誰かが大声で叫んだ。

李司令は、着ていた藍色の単衣をちよつと引っ張った。彼のこの服装は一年前と少しも変わっていなかった。ただ肩から肘にかけて赤いたすきが掛かり、他の連中と身分が違ふことを示すようになった点だけが、以前と異なっていた。彼は頭をあげ命令を下した。

「すみやかに各々の武器を取って、出発開始だ！」

彼は鉛色の顔をぬぐうと、土色の濁った目で劉強をじっとみつめた。

「おい！」

「何ですか？ 司令」劉強は、彼を司令と呼ぶのに抵抗を覚えた。

「自分の歩兵銃を取ってきな！ 俺たちはみんな行く。どうする？」李司令は下唇をかみしめた。

「もちろん行きますよ。お願いですから短銃を貸してくれませんか？」劉強は目を見開き、熱っぽく訴えた。

「歩兵銃では気に入らんのか？」李司令は彼に短銃を渡して言った。

「歩兵銃を渡しな……」

「老手に持っていていかれた！」劉強は弾薬袋を受け取った。

「お前はいい取り引きをしたもんだ」李司令はからかって言い、手を振ってから、雑然と集まってきた人々の群れの方へ歩み去った。

「あいつも俺の歩兵銃を狙っていやがる」劉強は短銃をつかむと、目で老手を追いかけるが、弾丸を調べた。

別のひとかたまりの連中が、せわしげに各自の銃の確認や点検、整備を繰り返していた。誰もが高揚した気分に含まれていた。銃の手入れを終えた連中は、元気づけのため、高粱酒をあおっていた。

太陽はカンカンに燃えさかっていた。谷間にも、砂漠地帯の乾燥した空気が充満していた。高渺たる薄雲が、まるで軽い絹のように飄々と舞い上がっていた。

彼らは、こうした酷熱の真昼のもと、沙陀子鎮に向かって出発した。どの顔も上気し、汗が額の端からしたたり落ちた。だが少しも疲れを覚えなかった。むしろ、意気は百倍もあがっていた。

「もっと静かにしたらどうだ！ 初陣なんだぜ。戦闘の時に余力がなくて困るだろう！」劉強は、集まっている連中の顔を一瞥して言った。それから一呼吸おいて続けた。「知ってるのか？ 途中には必ず偵察がいるんだぜ」

「おい！ ペチャクチャしゃべるな！ 分からないのか？」李司令は興奮気味に大声で怒鳴った。「沙陀子鎮についたら、ここでやっているようなだらしないことは厳禁だ。大事なのは、何頭の馬を手に入れられるかだ。それから、女に手をだすなよ。……これは戦争なんだからな」

彼は歩きながらベラベラしゃべった。頬骨の突き出した濃い小豆色の顔に、汗がかかっていた。彼はそれをちよつとぬぐうと、うごめいている人々の群れに目を向けて思った。

——いつか劉さんに、操行訓練を少し叩きこんでもらわねば。あんな歩き方では、さまにならない……劉さんはできる。彼は学校出なんだ。

みんな歩きにくい道に氣をとられていた。荆棘の枝、蒼耳の草むら、疾藜などの、ズボンに引つ掛かりやすいものを避けて歩いた。なつめと万年よもぎは枯れ気味であった。それらの植物は、道行く人の足に当たる碎石の隙間から生えていた。谷間の樹叢が、涼しげな木陰を提供していた。日差しが枝の間を通り抜け、草地に淡黄色のゆらめきを映しだしていた。大きな白樺の幹の厚い皮、幾重にも咲いた白い花、巨大な荒々しい樹根などが谷間から顔をのぞかせ、まるでウワバミがそこに潜んでいるかのようであった。

「もう葦子溝の出口だぞ！」劉強が老手を振りむいて言った。

「じきだ」于爺はちょうど靴の腹の部分の破れ目を、じっと見つめていたところだった。彼は、時々足を止めては細かい砂をかきだした。

「まずいな。靴がおじやんになっちまう。おい、俺はまず靴を新調せにやならんぞ。……朝鮮人の店には俺たちの履けるものはないし、中国人の店から失敬するのもまずいしなッ」彼は自分の靴を鑑定した。

「それよりおまえさんに大事なものは、絶対に銃をぶんどってくることさ」劉強は汗をぬぐった。

「まったくだ。そうしないとこの銃を返せないからな。しかし、お前のこれもガタがきてるぞ」

彼の伸びた髪は、じつとり汗ばみ、水滴が鼻梁をとって分厚い唇までじたり落ちた。汗の塩分が口のなかに広がったので、彼は唾を吐きだした。歩兵銃はずしりと肩にくいこんだ。身をかがめて靴に注意したり、肩の銃を交互に移し変えたりして、歩いている間少しも余裕がなかった。

他の連中は、ひどくのんびりしているように見えた。肩からぶら下がっている銃筒が、歩みに従って揺れ動いていた。銃の種類はバラエティに富んでいた。二連発の猟銃、空気銃、騎兵銃……。

「おれたちの部隊もまったくバラバラだなッ……」老于は感心しながら言った。

「あんた、怖くないのか？」

「おれが怖がるかだつて?！」老于は、侮辱を受けたというように目を見開いた。

劉強はニヤリとほえんだ。こいつはまったく面白い奴だ。

「おまえは学校で勉強してきただろ……おれに教えてくれ、関内（山海関以南の中国本土）から、我が軍はどうして進攻してこないのだ？」

「それは……」

「ビシッ！」一発の銃声が、話を中断した。

「誰だ？」李司令は銃をつかんだ。

「誰だ……斥候か?……」隊列が乱れた。

「暴発だ！」前方から知らせが伝わってきた。

「暴発じゃない。鄭老二が砂漠鼠でも撃ったんだろ」誰かが反論した。

「こんな大事な行進中に、またどうして砂漠鼠なんか撃つんだ！」李司令は叱責した。「急ぐんだ。誰かがまた銃をブツ放したら……こんどこそおしまいだ」彼は、おしまいだと言ったくらいでは兵隊たちを統制できないことを知っていた。しかし「殺される」という言葉までは口に出さなかった。彼は思った——おしまい、か!……きちんと規律をうち立てないと、ほんとうにおしまいだ。

砂漠鼠はすばやく動き回り、溝からは時々野兎が飛び出してきたりした。烏たちが兵隊たちの足音に驚いて飛び散った。原野の中の小さな生物たちは、繊細で用心深いのである。

大空のひばりは、音もなく飛び回っていた。関外（旧満洲地区）の特産のヒヨドリが、耳に心地よい長く尾をひくようなさえずりを聞かせていた。のびやかで軽快なカナリアは、小さな虫をついばんでは巢にもどり、ひなに与

えていた。

一面の明るく輝いている麦畑を過ぎると、目の前に一本の曲がりくねった道がのぞいていた。

西方の空低く、濃い赤味がさしだした。すると絢爛たる夕焼け雲が一つまた一つと、まるで一幅のすばらしい落日風景の油絵のように、広がりはじめた。大気は次第にひんやりとし、微風が穀物などの細長い葉に吹きよせ、高粱の幹が上下に波うった。背の低い愛らしい大豆も、葉をかすかにゆらめかせていた。鳥獣防止のカカシが、両手を横に伸ばしていた、赤い布切れが首筋にひらめいていた――たわわに実った、明るく輝いている麦畑のなかに立ちながら。

「はつきり見ろ！ 人間かどうか。勝手にブツ放すなよ」李司令は畑のなかで潜行をはじめた。

「銃を置け。戻ってから取れ」彼は小声で言った。

側にいた劉強は、珍しく不安に襲われていた。心臓は、まるで甲虫が髭をふるわせるかのようにドキドキしていた。彼はふるえを抑えると、そっと短銃をはずした。彼はあの時のことを、まだ記憶していた。あれは麻畑の畝の桔梗の下だった。

「おれたちに岐路を行かせてくれ。ほかの連中はここで待機させな」劉強の声の調子は極度に低かった。

「劉さんの言うとおりだ」李司令はのろのろした動きを止めた。彼はしばらく考えたのち言った。「老于。おまえは、俺たちの包囲網の銃声を聞いた

ら、すぐ抜けだして廐へ行つて馬を引っ張りだせ………忘れるな………できるだけ多くの馬をだ」

ほかの連中は息をひそめ、耳をそばだてていた。少しの軽率さも許されない、張りつめた空気を感じとっていた。どの人間の頭にも、ふるえるような感覚があつた。少し離れている連中は、銃を隠していた。そして穀物の葉を目印に置いた。鄭老二の長ズボンは、銃を隠すのに便利であつた。それで彼は、空拳を振り回し、まっさきに沙陀子鎮へ入つて行つた。

「ほかの連中には行かせぬ………おまえたち、早く行け！」李司令が言いつけた。

老于是劉強の袖を引っつかみ、岐路のあたりで身を起こした。

「………来いよ！」老于是言うのと、まるでかたつむりの角のように、左右をうかがつた。

劉強は彼といっしょに走つた。

眼前に迫つた沙陀子鎮は、すでに夜の暗闇のなかに溶けこもうとしていた。荒涼たる砂漠の小高い丘の上に、ごちゃごちゃと茅屋がのっかっていて。街なかの灯火が、遠くからキラキラと輝いていた。

沙陀子鎮の入口まで迂回しながらたどり着いた時、劉強は全身を不安に襲われた。彼は、注意をはらつて道行く人を見た。

商店は門を閉ざし、中心街は灯にすっかり照らし出されていた。ランプのガラス箱を支える柱が、等間隔で設けられ、一つの街灯から次の街灯までは、じゅうぶんに明るかつた。そして暗淡色で鈍く輝いていた。

老于はそれまでの経験から、道路と身を隠す曲がり角に注意した。劉強は彼とまったく口をきかず、そしらぬ顔をしていた。

正面を鄭老二が抜けていった。劉強はちよつと彼をにらんだ。あいつも、鬼瓦みたいな顔で、おれたち同様そしらぬ風をよそおつてやがる。

劉強は身構えながら体を固くし、警備詰め所の入口をサッと通りすぎた。そして隙を盗んでチラチラと視線を走らせた。何人かの警備兵がちょうど談笑しているところであつた。彼はさつさと老于のあとについて狭い路地から表へ出た。

「街の店屋がこんなに早く閉まるとは……」老于はゆつたりとあご髭をなでた。

「ピシッ！」突如銃声が響いた。

「ピシッ、ピシッ……」響きは続いた。

二人とも銃を抜きはじめたところだつた。

「早すぎる！」劉強は走りながら、弾を受け取ると、老于を自分の背後に隠した。

街のなかの銃声は、人々の悲鳴をまじえながら、いつそう激しくなった。

劉強はまっすぐ進んだ。煙があたり一面にただよっていた。気持ちのよい緊張感が、彼の本能的な勇猛心をかきたてた。全身が躍動していた。彼はサツとゴミ箱の後に身を隠し、目だけのぞかせると、射撃を開始した。

はじめはひどく窮屈な感じがしたが、それもしばらくすると銃声のなかで消えていった。彼は大胆になりはじめた。

「ピシッ……パシッ……」彼はなめらかに射撃を続けた。

「ビュッ——」鋭い音で弾丸が耳のそばをかすめていった。続いて、

「アッ！……」と、誰かが倒れた。

警備詰め所のガラスがこなごなに割れ、暗闇のなかで影がゆらゆらしていた。

「劉強！ おまえ……」よく知つた声が響いた。

劉強はひとさし指を伸ばした。

「おれは、あばたの王のともだちの……」

「郎世魁！……」劉強は驚いて叫んだ。

「撃つな！ 郎警備課長に話がある」鄭老二が土塀の隅から口を出した。

「劉さんと分かれば、投降するはずだ」李司令が間髪を入れず言った。

あたり一面はもとの静けさを取り戻していた。ただ煙がもうもうと立ちこめていた。犬たちの叫び声も、しだいに消えていった。

「劉強！」郎警備課長があわてて飛び出した。「どこだ？……」

人々は彼ら二人を静かに取り囲んだ。

「ああ！ まったく驚いた……おまえに会おうなんて。俺たちに加わらないか……そうすりや……」劉強はそこまで言うのと、わざと間を置いた。

「おまえの親父は、きのうH市に帰つていったぜ……」

「親父?! そんなこと、いま口にするな。祖国のことを考えるのが、一番大事なんだ。……」劉強は強い調子で言った。

郎警備課長は唇をかみしめ、救いを求めるかのように劉強を見た。

「おまえは売国奴の手先となるか？ 義勇軍に入るか？」鄭老二が彼の肩をこづいた。

「よし。義勇軍に入るなら、すぐに連れて行ってやろう。おれが司令の李だ」

「善は急げだ」鄭老二が付け加えた。

郎はあわれっぽく目を伏せた。

馬の蹄の音が、まるで雨をぶちまけたように湧きあがった。老子が意気揚々と、先頭になって引き連れていた。馬たちは驚いて人を呼ぶようにいないた。

「行こう！ いまの情勢を見れば、ここで警備課長を勤めていても……日本軍が戻ってくれば、また泥水を吞まされるぞ！……この機会に、おれたちはじゅうぶん備えを固めることができる……」劉強は郎の手を引っぱった。

——多くの警察……何百発もの弾丸……それで治安が維持できるのか？ 人跡未踏の砂漠なら別だが……郎警備課長はすっかり意気消沈したまま、自問自答していた。しかし彼の足は、みんなといっしょに動き出していた。

## (第7章)

「くそ！……あの……郎世魁の奴！……おれはどうなるんだ！」あ

ばたの王のきはだ色の顔が、ピクピクと痙攣した。彼はさっきからずっと、くどくどしゃべり続けていた。心の中ではあせりの炎が燃えさかり、むれてべつとりした汗が、珠となって顔のあばたをつたって流れた。

「こ、これは……天から降ってきた災難だ！」彼は、分厚い手を交互に揉んだ。

「ふん！」劉大人は鼻をならすと、煙を吐き出した。

「これは……これはどうしたらいいんだ？」あばたの王は一步近づいた。

「どうなるのか分からん！ 保証人になった時はまだ……やっぱり、あいつは義勇軍に連れ去られたのだ。——ただ奴がお前の甥だということは確かだが」劉大人はそれ以上言わなかった。

「ああッ……」あばたの王はベッドでおおむけになった。

「まあ、ひと口吸えよ。吸ったからといってアヘン中毒にはならん。だいたいようぶだから……」劉大人が、古い烟泡エンパオ（アヘンを溶かして丸くしたもの）をはがしながら言った。

「なんで俺がこんなに割りを食わなくちゃなんのか？ ただで日本人に家を提供して、烟館エンクワン（アヘン窟）では商売抜きで彼らを遊ばせている。西街の芙蓉楼でも二人の芸妓にサービスさせた。……商売はまったくあがったりだ。そのうえ、こんな目にあうなんて」彼は不平をもらした。

冷え冷えとした空気が、室内に充満していた。十人以上はじゅうぶん横になれる板敷のベッドが並んでいた。その上には、白いシーツがずっと敷きつ

められ、近頃そこで休んだ人間がいなことを物語っていた。そのことが、室内の空虚さを一層きわだたせていた。木製の棚が窓によりかかるように据えられ、そのなかに烟灯（アヘンに火をつける時のともしび）が、乱雑に置かれていた。灯の台座は油でべっとりしていたが、灯の傘のほうはいたって清潔であつた。

飾りつけも真新しい壁に、はしご状にアヘン用のキセルがいくつも掛かっていた。そして黄ばんだキセルの柄の上には、ほこりが積っていた。

「朝鮮共産党の連中がどんなに死のうが、わしの恨みはけつして晴れん……劉強の行方もまったく分からん！」劉大人は、ひらべったい枕によりかかりながら言った。

「みんな苦しい目にあっているぜ。それは同じだ。俺ん所のこの烟館も、ずいぶん客足が途絶えている。たまに来て、なじみの客ぐらいだ……ベッピンをはべらせている連中もいるというのに。くそッ、郎世魁の小僧が……」王はまた蒸し返した。

「ポン！」劉大人がキセルの柄を叩いた。

「あの小僧は、俺を牢獄にぶちこむつもりか」あばたの王は口許をゆがめた。

彼の話、劉大人は聞いていなかった。彼は黙って自分の子供の行方を思いめぐらしていた。

しばらく室内を沈黙が包んだ。ただ壁の時計だけが、チクタク、チクタクと時を刻んでいた。

劉大人は烟灯を吹き消し、肘であごを支えた。哀しみの波が、彼の身も心も浸した。彼はまるで別の世界をさまよっているかのようであつた。……

「満洲国境での商売は」あばたの王が言った。「もうあがつたりだ。……」

……国が滅びりや、家もない。……」

突然、一人の警官が入って来て、言った。「王經理、警務局まで！」警官の顔は、まるで鉄のおもりのように冷たかつた。

「えッ？……」

「行きな！ 看灯楼の連中を杉浦資材局長のもとに走らせ、何か手を考えろ」劉大人は立ちあがると、大掛（単衣の長いもの。金持ちなどがよく着た）をひっかけた。

「ああ！ 行こう」あばたの王の暗紫色の顔が、急に力なく崩れた。彼はだまって『凌雲閣アヘン小売所』を出た。……

劉大人は、狡い狐のようにこそそと家に帰った。

彼はこんな辛い状況のもで、もうこれ以上滞在できないと感じていた。

——この国では、だれもかれも去勢されているようなもんだ。……山東へ帰らなくちゃあ。

室内の梁はスースーと寒く、骨木が太鼓のように膨らんでいた。彼はオンドルの上に身を横たえ、巻きたバコに火をつけた。

室内の湿気が、彼の苦しみを増しているようであつた。

白い月明かりが、ガラス格子をとおして壁の隅を照らしていた。巻き上げた綿のカーテンのうえに、黒い影が落ち、まるで一枚の鮮明な木版画のよう



である。東の壁はまっ黒であつた。

寝返りをうつと、記憶が次々とまた彼の頭のなかでよみがえつた。彼は、今度の疎開を後悔した。まわりの黒い影を見つめていると、まるで劉強が今にも現れてくるように思えた。……彼の目のふちが潤みはじめた。劉強の笑つた顔、劉強の沈みきつた苦悩の顔、劉強のいつものしぐさや動き、……それらが湧きあがつてきた。

濃い煙が、彼の口許から流れ出た。それはどれも舞いあがつては頭のまわりで漂つていたが、やがて消えていった。すると彼は、また一口吐き出した。

焦燥と苦悩が、全身をかき乱した。彼は不安気に寝返つたが、睡夢はやさしく彼の心を包みこんでくれなかつた。目は痛々しいほど腫れあがつていたが、彼はやはり寝返りを繰り返した。

煙草の残りが指の間にはさまつて、赤い光りを放っていた。その光りを凝視していると、まるで失つた子供がそのなかに見えるように思えた。煙草の残り火は、あいかわらず無聊な空気をいつそうきわたせ、刻一刻と細かな灰に変化していった。

「ああッ——」彼は長くためいきをついた。

——メチャクチャな時代だ！ 早いうちに土地を売ろう。李特務に売つてもいい。——彼は考え続けた——お天道さまはきつと守つてくださるに違いない。劉強も無事に戻してくださるに違いない。わしは何も悪いことはしとらんのだから……。満洲で一旗あげるなんて、もうできっこない。

山東の故郷へ帰ろう。

彼は煙草の吸殻を投げ捨てると、身をよじつた。そして足を一杯に曲げ縮めた。しばらく静かになりたいと思つた。彼はたしかに疲れていた。

蕎麦殻の詰まつた枕に頭をのせると、彼は自分のうなじの筋がゴツゴツと当たるのが分かつた。それで、思い切つて起き上がり、袍子（ポウシ）（外側に着る単衣）をひっかけた。

「劉強がハバロフスクで生まれた時は、革命軍と白色テロの銃撃戦で、あやうく一命を落とすところだつた……あの子はほんとうに運の悪い子だ！」彼は、低い声で痛ましげに言つた。「あの子の運命は、すべてお天道さま次第だ！」

「ゴウ——ッ」まるでどこかで火災警報が鳴り、風にあおられた猛火の音が、窓の外からかすかに入ってくるようであつた。

彼は瞑想に沈みながら、耳だけをそばだてていた。

音は、ゆつくりと少しずつ大きくなつてきた。彼の耳は本能的に、この音が空中で鳴っており、次第に彼の家に近づいているのを識別した。

恐怖が彼を戦慄させた。彼は甲虫のようにひっそりとオンドルに這いつくばつた。

「飛行機だ！」誰かが中庭でわめいた。

「どこだ？」劉大人は、手で月の明かりをさえぎりながら仰ぎ見た。

「あそこ——ほら！」ちびの関（ツツ）が遠くを指さした。

街中の電灯が、突然消えた。

「また防空演習か」季のおやじさんが髭をなでて言った。

「ロシアの飛行機かも」ちびの関が疑わしげに言った。

飛行機は、上空高く一度旋回した。ほとんど識別できぬほど小さく、クルクルと旋回する様は、小さな燕のようであった。そしてゆっくりと雲のかげに溶けてゆき、腹に響く音もやがて遠のいていった。

「騒ぐな！ みんな家にもどれ！」街のなかを、伝令が乱暴な声を張り上げて回った。

やがて入り乱れた足音が、驚いた野獣さながらバタバタと湧きおこった。

「なかに入ろう！ ロシアの飛行機が爆弾をおとすかも」ちびの関が家のなかに駆け込んだ。

「防空演習じゃないのか……」季のおやじさんも立ち去った。

ただ劉大人だけが、中庭のまんなか黙ってぼんやりと立ちつくしていた。

「旦那さま。早く家のなかに隠れねえと！」ちびの関の母親が飛び出してきたが、ちよつと上空を眺めて、すぐにまた家のなかに駆け込んだ。

彼は相変わらず無言のままだった。

「爆弾はだれも関係なしに、殺しちまうぜ」季のおやじさんが窓から声をかけた。

「早くなかへ！ 大人！」

「旦那さん、どうしたんですか?!」ちびの関のかすれた声。

飛行機の音はそのうち消えてしまった。

家のなかの人々は、また中庭に集まってきた。街の方もふたたび灯火がつきはじめた。人々は、夜もすっかりふけているのに、三三五五集まってはひそひそ話をしていた。

「今日の飛行機は、いつものに比べて大きかった」季のおやじさんが低い声で言った。

「爆弾は投下しなかったんか？ ちよつと脅かしただけか？」ちびの関は、また家のなかへもどっていった。

頭上には、星が遠くまばらにポツンポツンと掛かっていた。それらはかすんだ満月の周りに散在し、その光は一層弱々しいものになっていた。澄んだ大空は、淡い藍色のカーテンを引いたようで、リボンにも似た雲のすじが、天の河に斜めに掛かっていた。

時としてもろに吹きつけてくる涼風が、人々をしっとりとした暖かさでくするみ、爽快さと伸びやかさを覚えさせた。

劉大人はもの思いにふけていた。——ロシア人が進撃してくるかも知れん。黒頂子山ヘイティンツシヤンのあの小屋も売ってしまわねば。でなけりや、あの土地はきつとくすねられてしまふ。お天道さま、守ってください！ 劉強を早くもどしてください！……山東へ……わしは、きつと山東へ帰る。

彼は相変わらず中庭に立ったまま、一步も動こうとしなかった。

## (第8章)

毛吉隊長は、ソ連機の国境侵犯を述べた報告書を置いた。彼は、そのこと

で日本領事館へ行くつもりはなかった。というのも、いまちょうどある事を計画中であったからだ。

彼は焦燥だけでなく、憤りさえ感じていた。執務室のなかを、まるで閉じ込められた飢えた狼のように、ぐるぐると歩き回った。

禿げた頭のでっぺんは、テカテカと光っていた。頭の後ろと耳のまわりは、きちんと櫛の入った黒髪がかかり、濃い口髭が、鼻先まで伸びていた。白いズボンをはき、両足を刺繍のあしらつてあるジュータンの上で動かしていた。

彼は葉巻きの煙をせわしく吐き出しながら、安楽椅子に座った。手を額にあて、繰り返し日市の見取り図を眺めた。真っ白い綿の椅子のカバーは、彼のためにしわしわになってきた。彼は地図を指で弾くと、立ち上がり、窓に接した長い机の方へ行った。机の上には新聞紙や電報が散乱していた。彼は、白磁の煙草盆の上に指で灰を落とすと、また元の場所に戻った。

壁の時計は、彼のひっそりとした足音を邪魔することなく、規則正しいリズムをつつましく奏でた。彼は新しい型の書棚のそばでちょっと立ち止まると、また壁に掛かった日市の地図に目を凝らした。モクモクと煙草の煙が、彼の口からもれた。

新鮮な陽光が窓から差しこみ、部屋のなかは明るかった。彼は書棚の脇へ手を伸ばし、電灯を消した。

日市の見取り図をまたはずすと、彼は両手で机の端に広げた。はじめは体を支えている腕に痛みが走るのを覚えた。しかしやがて、そんなことなど

まったく問題にならない、といったようにほほえんだ。それは得意気な、睡眠不足の表情を一掃するようなキラキラ輝いた微笑だった。

「これこそソ連や馬賊や朝鮮共産党をやつつける手段だ。ふッ」ひっそりと独り言をもらした。

彼はもう一本葉巻きに火をつけると、ちょっと頭をあげた。

「よし！」彼は最後の決断を下した。

煙草の灰が綿の椅子カバーに落ちたが、彼は落ち着いて一吹きした。そして地図をたたむや、右手で呼び鈴を鳴らした。

「警務局長を呼んで来い！」彼は、呼び鈴を聞いて入ってきた伝令の兵隊に命令した。

「ハッ！」兵隊はうやうやしく敬礼すると、出ていった。

彼はいくらか気持ちが悪くなった。フツと息をつくとき、背もたれのついた椅子に腰をおろした。そして次に横向きに腰をかがめ、キリン印のビールを取り出すとコップになみなみと注ぎ、痛快そうに喉に流しこんだ。

「ウッ——」彼は目を白黒させた。

警務局長が余りに早く来たからだ。局長は、三十過ぎの頑丈そうな体つきの人間であった。

「おはようございます。毛吉隊長」彼は流暢な日本語で言った。

「……………」毛吉は彼をちよつと見て、何も言わなかった。

警務局長は、演壇のような作りの補助椅子の方へは進まず、その前の少しへこんだ窮屈な場所につつ立った。そして両足をきちつと揃えた。かたわら

には、毛吉隊長の黒いブーツが置いてあった。

「おまえも知つてのとおり……」毛吉隊長は片手をズボンのポケットに入れ、ゆつくりと話した。「H市の治安は、いま最も重要な課題だ。この前は沙陀子鎮が馬賊に襲撃され、警務局の銃火器をずいぶん奪われた……」彼は冷やかに局長を見つめた。蔡局長の方はといえば、垂直におろした手をもすすピンと伸ばし、几帳面に話を聞く姿勢をとっていた。

「ところで……昨夜ソ連軍機が突如越境して、我々を偵察したが……」毛吉隊長は自然に足を震わせていた。「わしは今、満洲国に戦闘機を派遣してもらえような、ちょうど好い飛行場基地を思いついた。黒頂子山の東南の隅がそれだ。あそこはソ連と接近している。おまえ、ちょっと土地台帳を調べて……地主に話をつけろ。一畝あたり四、五十円でやつらの土地を買収するんだ」

「ハイ。ハイ」蔡局長はずっと立ったままだった。

「すぐ戻って始めろ！」毛吉隊長が手を振った。

「ハイ。……隊長にお願いですが、もし今後なにかありましたら、電話でご報告申しあげてよろしいでしょうか？」

「おまえは、いつからそんなに偉くなったんだ？」毛吉が反論した。

蔡局長は進退窮してしまった。

「行け！」

「ハイ！」彼は最敬礼をして退出していった。

彼は警務局にあわてて戻ると、言われたそのままを土地担当課長に命令し

た。「……超特急でとりかかるんだ！ 国が飛行場をつくるため土地を没収する、と地主にいうんだ」

「ハイ！」課長は曖昧に返事をした。

「地主には表彰状を一枚出してやれ」蔡局長は一言つけ加えた。

そして、彼はすぐに警務局の裏手の公館に戻っていった。

「まったくバカにしがって！ こんなに朝早くから、どうでもいいような用事で人を起こし、俺の前で威張り散らし……なにが関東軍派遣隊だ。まったく、くそつたれめが」彼はブツブツと罵りやめなかった。

彼が家に入ると、妻が蓄音器をいじっているのが聞こえた。彼はやりきれないといった感じで言った。

「こんな世の中では、マージャンでも打つか、レコードでも聞かなければ、気持ちがおさまらんよ」

「まあまあ、どうしたっていうの？」妻が愛嬌を振りまきながら出てきた。

彼女はあかぬけした女性であった。人を誘うような目が、くると媚を含みながら動き、潤んだ美しい黒い瞳からは、したたり落ちるような色気が漂っていた。

彼女がレコードに蓄音器の針を落とすと、蔡局長の頭からしだいに苦悩が消えていった。

「媛秋、わしは……」彼は申し訳なさそうに目をしばたいた。

しかし彼女の方は、なんの悩みもなく、いつも笑っていた。その笑いは、

昔彼が日本に留学していた時と、少しも変わっていなかった。ただあの頃と変わっているのは、その時に李媛秋と呼ばれた彼女が、今では李園秋子という名になっていることだった。

「あなたは、毎日そんなに苦しんで、きっと想像もできないような事情がおありなのね」秋子はクッションの付いた椅子に腰を移すと、彼の懷に頭をうずめた。

彼女は、細くしなやかな指で彼の胸に掛かっている銅のボタンをもてあそんだ。気持ちのよいものが彼の全身を包みこんだ。……彼も、女の細い髪を愛撫しはじめた。

「かわいい奴、わしの宝物だ。おまえは東京にいた時と同じまだ……：天真爛漫さが今も瞳のなかに宿っている」彼は、まるで骨髓が溶けて液体となってゆくような気持ちのよさを覚えた。

彼女の目は、レースのテーブルクロスを敷いた机の上の、真っ赤なすみれの花が活けてある花瓶を見つめていたと思うと、くるりと振り返った。その優しい息遣いや甘えるような振る舞いに接すると、彼は愛情の深い淵に引きづりこまれるのであった。

「わたし、何時になったら東京へ戻れるの？」彼女の声は、この上なく甘ったるい調子であった。

「よしよし、わしは近々まとまった金が入る。あばたの王が納めにくる……：入ったら、きつとお前を行かせられる」彼の手は、ついに男の荒々しさをむきだしにした。

彼女がちょうど起き上がろうとすると、不意に彼に荒々しく抱き止められてしまった。彼は、震えている女の胸元に顔をうずめたかと思うと、自分の唇を彼女の赤く薄いそれに重ねた。

彼女は、男の広い胸が自分を屈伏させてしまうような力をもっていると感じた。彼女は綿羊にも似て、彼が与える恩寵を受け入れた。一種甘美な味が、神経の隅々まで浸透していった。

「またね……」彼女は恥じらいながら立ち上がって言った。「ほんとうに、この治安の悪い土地を離れたいわ。わたしいつもビクビクしているのよ」

「無論わしも、これ以上お前をここに住まわせ、ビクビクさせるつもりはない」

「ちよっと手を放して。お茶をいれてきますから」

彼女はまず鏡台の前に行くと、ちよっと髪の毛をすいだ。模様を刻んだ黒っぽい銅色の木製の鏡台の上には、キョーリン歯磨きやキョーリン口紅、その他の化粧品が置いてあった。そして一つのおおきなソファーがそれに付属していた。

秋子は煙草に火をつけると、笑いながら彼の方に向かって煙を吹きつけた。彼の方はいえ、ちよつと溥儀（満洲国皇帝）の軍装の肖像を見つめているところであった。

「報告！」門衛が外で叫んだ。

彼は女の方をちらっと眺めると、すぐ自分で武装帯をひつつかんだ。顔は

たちまち塑像のように、嚴肅で冷靜な表情に変わった。

「入れ！」彼は腰をおろした。

「局長！ 資材局の杉浦局長から電話です」

「えっ。誰だ？ 知っているか？」

「ここの日本人紳士です」門衛が説明した。

「ああッ。またまたやっかいな奴が！ まったく……………」しかし蔡警務

局長は電話室に入ってしまった。

耳を刺すようなベルの音が響いていた。彼は銅製の鉤かぎから受話器をはずした。

「どなた？」局長は日本語で聞いた。「ああッ！ 杉浦先生……………凌雲閣

の王經理ですか？……………むりですが……………はい、それは構いません。ええ、

彼はあなたの大家ですから。では」

「ふん！」彼は乱暴に受話器を置いた。

「王占ワンチャンを呼んであばたの王と一緒に資材局へ行かせろ。終わったらまた

留置場へ戻せ」彼は振りむいて門衛に言いつけた。

「王占は賞状を配りに行っています」門衛がそばで立ったまま言った。

「どこへ？」

「飛行場用地に土地を提供する地主の劉林リウリンのところですよ」

彼は一言も答えず外へでた。

(第9章)

日はちょうど真西に傾いていたが、王占はまだ劉大人と話していた。

「わかった。二等感謝状のほうか」王占は黄色い歯を見せて言った。

「いや、いやまったくわしは考えたこともない。もしかしたら……………わし

が道案内をしたため……………ゴホッ……………ゴホッ」劉大人の声は咳で中断され

た。彼はその大きな封筒を開け、咳こみながら読んだ。「私は日本軍のため

に朝鮮……………ゴホッ……………」

「いくらかご祝儀をはずまんかね」王占が卑しそうに笑って言った。

読み進んでいた劉大人は、突然全身を震わせた。

「こいつは一体なんだ?」彼は狂ったようにその賞状を破り捨てた。

「ゴホッ……………こんな子供騙しで!……………わしは命など惜しくない。わし

は……………一生苦勞しながら、あの土地を手に入れたのだ。むざむざと人にや

れるか! 飛行場を作るからといって、賞状と交換できるもんか! ゴ

ホッ、ゴホッ!」彼は、心臓が破裂するほどの怒りを覚えた。

隣近所の連中が門のまわりに集まり、みんな驚いてこっそりと物陰からの

ぞいていた。

「これじゃ……………真綿で首を締められるようなものだ……………ゴホッ」劉大

人の薄い髭が震えはじめた。

「知らんぞ。どんなことになってもなッ」王占は一瞬躊躇してから、こそ

こそ逃げだした。

「疫病神じゃ! おまえらは……………」劉大人は、荒々しく息をつく咳

こんだ。よだれが下顎に流れ落ちた。彼の目の網膜には、無数の黒い泡が現れ、輪となって拡大し動きまわるのが映った。まるで大地がまさに崩壊するかのように、まわりの物すべてが激しく揺れ動いた。そして脳髄が血漿のなかに溶けてゆくような気がした。劉大人は、意識を失った。

「グッ……」足がぐんにやりとなり、痙攣しながら彼は倒れた。

「大人！」季のおやじさんが、人をかきわけながら叫んだ。

「オンドルまで運ぼう！」ちびの関が、病人を助け起こしながら突き進んだ。

家のなかでは人々でごった返し、室内は明らかに狭くなっていた。人々はざわめきと怒号で、乱れた麻のような状態であった。

「こりや、アヘンの発作だ……」一人のハゲが言った。

「息子のことを考えすぎたんだ」別の一人が答えた。

「帰ってくれ！ 見世物じゃないんだ」季のおやじさんが邪魔そうに言った。

ただ女たちだけは、忙しく水を探していた。

「熱い生姜湯しょうがゆをかけるのがいい——熱い生姜湯をかけるのが」

「関盛！ 朱先生チュウセイを連れておいで！」ちびの関の母親が言った。

すぐにちびの関が、そそくさと走り出した。

オンドルの上に仰向きに寝かされた劉大人は、スースーというかすかな息を、口のなかから吐き出していた。彼の黒い痩せこけた頬は、一段とそばおち、顔色は恐ろしく青白く見えた。深く窪んだ眼窩は、ひっそりと閉じられ

ていた。

関盛が朱先生とあわただしくやって来た時、激しいにわか雨が降りだしていた。荒縄にも似た雨の筋が、すだれのように幾つも掛かり、家のブリキの屋根が、打たれて大きな音を立てていた。

朱先生は、齒ブラシのような髭をつけていた。彼は色褪せた古い洋服を着ていたが、首のネクタイは一応模様をぬいとしたものだった。

「これは心臓麻痺だ……神経が余りにも、刺激を受けすぎたんだ」彼は眉をひそめ、うなずいた。

「どうですか？ 先生！」季のおやじさんが心配そうに尋ねた。

「一本打ってみよう！」

ちょうど隣近所の連中は、中庭へ我先に争って駆け出し、干してあって衣服を——漬物の瓶の上に干してあるものさえあった——取り込んでいるところだった。……家のなかには、ちびの関と数人の老人が残っているだけだった。

朱先生は黒い鞆を開け、脱脂綿や点滴管、薬品などを取り出した。

彼は、脱脂綿で劉大人の痩せた腕を拭き、冷静に患者の顔を見つめた。そして素早い手つきで注射針を刺した。腕の肉はピクリとも動かず、顔色も紙のように白かった。

しかしゆっくりと、劉大人が目を開けた。ぼんやりしたその目は、おどおどしながら何かを求めているようであった。

「劉強！ おまえはどうして……いるんだ？ 嫁ももらわず……自分

ひとりで生きていけるのか？」

蚊の鳴くような小さな声だった。

彼の顔には、何の表情も浮かんでいなかった。目の端から涙の粒が流れ落ち、こめかみの方に向かって二筋の線を描いた。すると、突然身震いしてまた目を閉ざしてしまった。

朱医師は、患者がもう手をうつ必要がない状態になったのを見て、ついに家から去っていった。

関盛は顔をそむけた。彼は寒々とした気持ちになっていた。

「旦那、旦那も………なんとかいいそうなお人だ！」

「なんて時代なんだ！ おとしまでは地主だったお人が………こんなに没落破産しちまうとは！」

「こういう時代なんだ………こういう………」人々は散っていった。

雨は勢いよく窓のガラスを打ちつけ、窓枠に侵入した。遠くの雨音は、まるで無線電信の音のようにけたたましく響いていた。

オンドルの上の劉大人の死体は、頑固そうに突っ張ったまま横たわっていた。

「誰が仏さんを世話する？」関盛がオンドルから這い降りた。

「山東の同郷人を探してこよう」

季のおやじさんは、劉大人の顔の上に白い紙をのせた。

(第10章)

「おまえが郎警備課長の身元保証人か？」

「はい」

「奴が寝返ったのは知ってるな？」

「いえ………彼は、匪賊に連れ去られたのだと聞いています」

「………それはまだ調べねばならん」蔡局長はあごを撫でながら考えこんだ。

「あいつは——」また突然彼は、あばたの王の方を向いて言った。「銃を七丁も持ち去った。………そのうえ三千元の公金も」

「局長………」あばたの王の暗紫色の顔は、懇願を求める恐縮した表情になった。

「よく聞くんだ」激しい口調だった。「おまえは今から五千元の賠償金を作るんだ。その後で………」

「局長………わたしは黒頂子山へ行けばあいつを見つけだせます——あいつを連れ戻してきます」

「黙ってろ！——」そうだ。まず三千元の保証金を作って納めれば、とりあえず自由にしてやろう」

「局長！」彼は目を伏せ、懇願して言った。「納めるといっても、わたしには………本当にないのです」

「凌雲閣アヘン小売所を開きながら、どうして三千元くらいの金ができないんだ？」局長の顔色からちよつと厳しさが消えた。



「うちの店は、まだ借金が残っているんです。局長！」

訊問はしばらく中断した。蔡局長は下の歯で上唇を噛みながら、黙って視線を机の上におよがせていた。あばたの王は、局長の口許をじっと見つめていた。

「こうしよう！」そして局長は、憐れみの情を持ったように続けて言った。「おまえが本当に納められないのなら、……じゃあ、特別に大目に見てやろう……まず千五百元持って来い。そのあと、集まり次第残りを納めるんだ。それならおまえにも出来るだろう」

「わたしは本当にないんです……」彼は懇願の姿勢を崩さないで、その厚い唇を少し開いた。

「それじゃあ、不動産もないのか？」

「ないことはないのですが、貸家は日本人のお客が三ヶ月も家賃を滞納しているのです……」あばたの王は依然自分の苦しさを訴えた。

「局長！」背後から声が飛んできた。蔡局長は振り返った。

「電話です。——日本人から電話です」

「伝えろ。いま事件を審理中だ」彼は鬱陶しそうに言うと、また王の方に向き直った。

「向こうはヤイヤイ言ってますが」交換手がつけ加えた。

「チッ！……」彼はドカドカ歩いて電話室へ行った。

激しい怒りにかられながら、彼は乱暴に受話器を取り上げた。

「おまえらは、人の言っていることが分からないのか？ 俺の親友の

王を連行して、話が違うじゃないか。人をバカにしているのか？ よく耳を澄ませて聞くんのだ。俺を見損なうなよ。……

次々と言葉が、受話器から流れてきた。

蔡局長の手が震えた。彼は、自分を罵倒しつづけている相手を思い出そうとしていた。すると、あの「日本人紳士」の名前が、石碑のように彼の喉もとを圧迫した。彼は手のひらで受話器を押さえ、交換手に言った。

「おい！ 凌雲閣の王經理を帰せ！……」彼は頭を下げて言った。

「先生には申し訳ありませんでした。彼はいますぐ帰られますから」

受話器を置き、部屋に戻ると、激怒が彼の全身をとらえた。彼は、火焰にも似たいらだちを抑えることができなかった。

「まだ何か事件があるのか？」

「あと一件だけです」色の白い書記が答えた。

「持ってこい！」彼は元の席に戻ると、調書をめくって言った。

「この女はひどすぎる。亭主が救国軍に入り、正妻が訴えて……密通ほど不道徳なものはない。留置場へ入れて、明日もう一度連れて来い」

執務室から官舎に戻ると、彼はますます鬱陶しさを感ずるようになった。

周囲のあらゆるものが彼を圧迫し、息を詰まらせた。彼は、巨大な蒸気の渦の中に巻き込まれたかのような、名状しがたい苛立ちを覚えた。まるで絞首刑の囚人が最後の一息を吐くような、窒息状態に陥った。

「こんな局長なんか何の意味もない！ 一介の日本人軍属すら、わしに命令できるのだから。わしはただただ他人の、いやすべての日本人のいうが

ままた、犬ころのようにこき使われるだけだ。バカバカしい……」彼はがっくりしながら戻ってくると、ふかふかのベッドで仰向きになったり、ソファーに足を投げ出したりした。

「バカバカしい……バカバカしい……」

ちょうど猟師に洞窟の中へ追い込まれた小さな獣のように、彼は苦しみ怒った。

秋子は、関東軍派遣隊の毛吉隊長の所へ、マージャンをしに行っていた。家のなかには彼一人だった。

机の上の置き時計が、固い沈黙を打ち破った。彼は時計を眺めた。神経をいらだたせるそれを、憎たらしく思い、何か重いもので叩きつけ、粉々になるまでぶん殴ってやろうかと思った。が、結局はできなかった。彼は拳を握り締め、鷺<sup>がしやう</sup>鳥の羽の入った枕を殴りだした。「腰抜け！ バカ野郎……」

「お知らせします！」門衛が外から叫んだ。

「入れ！ 報告、報告と、四六時ちゅう報告だ」彼は叱った。

「金警備課長がご面会です」門衛が恐縮しながら名刺を差し出した。

「誰だ？」彼は驚いて頭を上げた。

「新任の黒頂子山の警備課長です」

「これは……」彼はいぶかりながら頬を膨らませた。

「宮野指導官の任命した人です」

「彼に言え。わしはおらんな」彼はカリカリしながら跳び上がった。

「はい！」

彼の内面は、砂礫がぎっしり詰まったような状態だった。キリキリとこめかみを縛り上げられ、まるで頭が今にも破裂しそうだった。

「あいつがやりそうなことだ！ わしが……警備課長ぐらい好きなように……くそッ！」額の上には青筋が充血し、あごがワナワナと震え、おこりに襲われたようだった。

「日本人軍属には脅され、指導官には無視され、毛吉にはこき使われる。死ぬというのか……わしに……」彼は突然軍帽をひつつかんだ。

「宮野指導官の所へ行ってくる」彼は門衛をちらっと一瞥した。

門衛は手回しよく雨具を持って、彼のあとについてきた。

街頭の道路は、碎石を敷き詰めてあった。側溝の道には数えるほどの人しか歩いていなかった。

彼はぼんやりと頭を垂れたまま、商店街の前を素通りしていった。店屋は全部開いているわけではなかった。締まっていたり、半開きになったりした戸の上に「出兌（売ります）」の紙が貼ってあったりした。

「あの指導官め……警備課長を任命しやがって。そこまでわしに介入できるのか……野郎！」

彼は、思いついた言葉を相手にぶつけてやらねばならないと思った。彼はよろよろと足をひきずるように動かした。

正面からひとつの寝棺が現れた。

——縁起でもない——彼はひとりで嫌な想像をした。

暗紫色のあばた顔が、棺桶の後ろについて歩いてきた。その男は頭を垂

れ、劉大人の死を憂い悲しんでいるように見えた。

——満洲国……この国からわしらは見捨てられるのか？　しかし、わしは生きねばならん。一本の道を切り開かねばならん。わしはきつと……今年（癸酉）を乗り切るぞ。わしは、あの日本人のやくざたちが、日が沈むように没落して行くのを見届けねばならん。その時は何度でも拍手してやる。

「あばたよ！　この棺桶はどこから都合してきたんだ？」誰かが尋ねた。

「山東会館から貰ってきたんだ」あばたの王は、急に恥ずかしさを覚えた。寄捨の棺桶を貰ってきて、まったく面子が立たなかった。彼は、よく知った人間の質問をできるだけ避けたかった。

——友人の死に際して、おれは棺桶を買う錢さえなかった。それなのに、一人前の顔をしている。……彼は、関盛と季のおやじさんが担いでいる棺桶をちよつと見た。

白い楊の木の板には、あらゆる植物模様が描かれており、且つ棺のまわりには削り屑が一杯くっついていて、職人が丁寧に作ったようにはとても見えなかった。長方形の棺は、狭く窮屈そうで、哀れなほど粗末だった。

中庭に着いた。あばたの王は、棺桶の中から経帷子を取り出した。

「友人よ。おれは……本当にこんな時代で、どこへ金を借りに行ったと思うかい？　昔だったらおれは勿論どんなことをしても……まして棺桶だから、おれは面子も捨てて会館へ行ったよ」彼は恥じらいながら言った。彼は、劉大人の霊が自分を許してくれるのを求めた。

しかし、死体は相変わらずひっそりとしていた。顔の皺は伸び開き、頭蓋

骨にびったりとくっついていて、顔色は暗く蒼ざめ、わずかに開いた口許には、少し黄ばんだものが残っていて、煙草で黒くなった歯を際立たせていた。深く落ちくぼんだ眼窩は、まるで小さな釣瓶のようであった。

あばたの王はすすり泣いていた。そしてこの死体に、だぶだぶの人絹の帷子を着せた。つるつるに剃った頭には、まるで鶏冠花のような赤い紐のついた帽子をかぶせた。

同時に関盛は、死体にきれいな青の洋羅紗の長筒靴をはかせた。

それが終わると、人々は慎重に死体を抱き起こし、薄板を張りあわせた棺桶の中へ納めた。

「おおッ！」季のおやじさんが釘を取り出しながら言った。「あれほど一旗上げるって、言ってたのに……金槌は？」

「棺は打ちつけなくてもいい！　彼の息子が戻ってきてから……」誰かが言った。

あばたの王は、孝帯（シャオタイ）（葬儀の参列者が弔意を表すためつける帯）で固く腰を縛り、物憂げに棺の後から無縁墓地に向かった。

彼は脇の下に紙銭と折り畳んだ元宝囊（エンバウ）をはさんでいた。片方の手の中には、「劉林の墓」と記された札を握り、もう一方の手には錫の酒壺をさげていた。壺の口には磁器の杯がのつていた。

棺桶を担いでいた季のおやじさんは、ずっと咳こんでいたが、アヘン窟【看烟燈】の常は、劉大人の同郷の連中と笑っていた。

道路はひどくぬかるんでいた。車の轍（わだち）の作った溝が、汚水をためこんでい

た。はねあがる泥水が、みんなのズボンの裾を汚した。

——人はいつかは死ぬ。しかしおれは生きねばならん。生きてゆくのが難しいこの国でも、おれは生き続けねばならん。……ここはおれたち中国人の土地なんだ。

あばたの王は、草地の方に目をやり、思いを凝らした。

緑の草が、曲がった樹木の下で、こまごまと可憐に生え群がっていた。それらはひっそりした道端に沿って成長していた。夕陽はそれらすべてを、暖かく照らしていた。

樹木の梢の間にいた鳥が、連れ立って人々の頭上を飛び去った。その悲し気な鳴き声は、あばたの王を凄惨な気持ちに落とし入れた。

彼は十字路ごとに立ち止まり、幾枚かの紙銭を焼いて、困窮している幽鬼たちに施しを与えてやった。それから、いくつかの狐を祭った廟を通り過ぎるたびに、おなじように紙銭を燃やすのだった。

野原のなかの墓は、以前に比べだいぶ多くなっていた。乱雑に生い茂った草が、それらの墓を覆い隠していた。朽ち果てたような墓石は、どれもこれもみな風雨の浸食で崩れかかっていた。薄っぺらな赤い木棺は、そのなかに置かれ、凄絶な黄昏の風景をいっそう飾りたてた。

「キャン！ キャン！」無縁墓地の中庭で、犬が狂ったように鳴き叫んだ。

墓守の老人が小屋から出てきた。

「仏様はどなたかね？」彼は興味なさそうに聞いた。

「わたしの友人、劉林だ」あばたの王が声を震わせて言った。

「会館の証明は？」彼が瘦せた手を差し出した。

「うん。ある」あばたの王が懷をさぐった。

「埋めるんだろ？ 早くしたほうがいいぜ。すぐ暗くなっちゃう」

「仮埋葬だよ。息子に一目会わせないと」

「じゃ、裏庭へ担いでいきな」老人は冷たく言った。

裏庭の棺桶は、乱雑に放りだしてあった。草のむしろでくるまれているのもあれば、煉瓦で囲まれているものもあった。どの棺桶も、上に薄い紙が置いてあった。

「ああッ！ 山東人はこの満洲でどれぐらい亡くなったことか！」季のおやじさんが、心を震わせるように嘆息した。

彼らは助けあいながら、白い楊の木でできた棺を置いた。ちょうどその左に、ブリキでくるまれた棺があった。

「これは沙坪鎮で救国軍に殺された小隊長だ」墓守の老人が彼らに説明した。

「おお！」あばたの王は、棺桶の前にうずくまり、残りの紙銭を全部燃やした。

彼は、心の内部が急に虚空となったように感じた。彼は黙って燃えている紙銭の火をじっと眺めていた。灰が火の中で舞い、その光景の中で彼は生きる道を考えていた。風が出ると、灰の屑は飛んでいってしまった。彼は驚いて目覚めたように、手を震わせると高粱酒をなみなみと注いだ。そして、お

供えとして灰塵の上にまんべんなく降り注いだ。余燼が緑の光を放った。

彼の目は次第に潤み、涙の粒がゆつくりとしたたつた。まるで最愛の子の頭をなでるように、両手で棺の隅をなでた。そしてゆつくりと顔を起こすと、涙のたまった目で棺桶を正視した。そして頭を振りはじめ、振り絞るような音調で震えながら言った。

「友よ！ おれは何と言っているのか……分かつている……おまえが、やりきれない思いを抱いていたまま、おまえが……」

### (第11章)

電灯が強烈な光を放っていて、室内の透明な装飾物は、みな光を反射してキラキラ輝いていた。その一方で、室内の空気はもうもうたる煙でいぶっていた。

電球の下の食卓には、山海の珍味を盛った大皿が所せましと並べられていた。その大皿の周囲には、磁器の取り皿が並び、二本の黒檀の箸から汁がしたたっていた。蔡局長は、箸を持ったままブラブラさせていた。彼は話をきりだそうと考えたが、結局また喉の奥に押し戻した。

「蔡局長は今のべた問題に、きつと賛成でしような」宮野指導官はビールを飲んでいたが、高い足のグラスを捧げながらそう言った。

「そりゃあ無論だ。言わなくても分かっているじゃないか」毛吉隊長の顔は、もうすでに酒気で真っ赤になっていた。彼は両足の踝くるぶしを食卓の隅で合わせて、話をするたびに震わせた。

「毛吉隊長のご提案、じつに痛快ですな。勿論わたしも嬉しいかぎりです。日市の交通発展と兵員輸送の立場からも、おおいに利点があります……」蔡局長は取つて付けたように言いながら、煙草の灰をちよつと落とし、考えてまた続けた。「要するに、商業上も軍事上も、きわめてメリットがあるということですね。もし軽便鉄道の敷設が成功すれば、の話ですがね」彼は日本語によくある微妙な言い回しを使った。しかし心の中は別のことを考えていた。——この機会に思っていることを言うべきではあるまいか。

そこで彼は、一杯飲んだ。自分を勇気づけようとしたのである。しかし資材局の杉浦が発言した。

「それじゃあ、明日開く軽便鉄道会社の発足総会に、何人か出席させるように……」

「わたしもお手伝いしたいと考えてはおりますが、しかしなんせ初めての顔合わせですから」彼は笑顔を作つて言ったが、目は燃えさしの煙草の火に注がれていた。

濁った朝鮮産の煙草の匂いが、室内に充滿して、人に息苦しさを覚えさせた。その鼻を衝くような刺激臭は、キンピールの強烈な苦みをさらに引き立てていた。

蔡局長は躊躇しながら考えていた。——この一言だけは必ず言わねば。

「指導官は警備課長をも采配できるのですか？」と。

「近頃は馬賊たちも、すっかりおとなしくなっている」毛吉隊長は真っ赤に充血した目をギョロリと動かして言った。「飛行場と、いま話に出た軽便

鉄道の竣工は、おそらく冬にはいる頃だろう。討伐の時期を考えても、ちょうど助かる」

彼は、話ながら得意そうに頭を揺らした。禿あがったその頭は、電灯の下でまるで満月のようなであった。

蔡局長は、毛吉隊長の踝の下で軍靴の拍車をじつと眺めた。彼は自分が今言わんとしていることを反芻していた。――毛吉がここにいては、うまくいかない。こいつはうるさいからな。今ちやうど酔っぱらっているのだが、……

「飲もう！」宮野指導官が、高い足のついたグラスを差しあげた。

グラスを通して、まるで処女が頬を赤らめた時のような、赤い液体が透けてみえた。彼らは互いにグラスを合わせると、バラのような色の酒が波立った。毛吉隊長は銘酊のあまり、酒を胸元にかけてしまった。しかし、彼は目をうつすらと開いたまま、それを喉に流しこんだ。

「蔡局長！ おまえのかみさんは、随分とベツピンだな。まるで晩秋に桜の花を眺めるような、不釣り合いを感じさせるよ」彼のテカテカした頭が、椅子の背にもたれかかっていた。

「ふふッ……」杉浦局長がスープをすくいながら笑っていた。彼は足を食卓の下でまっすぐ伸ばして、ちやうど物憂げな猫のような姿だった。

「知ってるか？ 二ヶ月前に馬賊たちが、近くの沙坨子鎮を攻撃した時……警備の巡査が多数寝返ったが……おまえは毛吉隊長に感謝しろよ。間島（吉林省東部、延吉と図們の中間に位置するソ満国境の要衝）の関東軍総派

遣隊司令部への報告では、おまえのために大いに言いつくってもらったのだからな」宮野指導官はからかって言った。

「フフッ……蔡局長は満洲人の中でも、もっとも誠実で話の分かるお人なんだ」杉浦が目細めて言いながら、まるで子供でも褒めるようなしぐさで蔡局長の肩を叩いた。

毛吉隊長は葉巻煙草をつまむと、蔡局長のほうに目をやった。

「忘れていたが、金警備課長はおまえの所へ行ったか？」彼は顔を引き締め、同時に足もひっこめた。

蔡局長はなんとも困ってしまった。愕然としながら毛吉のほうを見つめ、しどろもどろに答えた。「わたしは……知りませんが……」

「金警備課長は以前は領事館詰めの巡査をしておった。忠実な男だ」宮野が説明した。「この警備課長の職務については、だいぶ時間をかけて相談した。出席者として県庁詰めのかね原参事官にも来てもらって……それでやっと彼を黒頂子山の担当に決めたのだ」

「それは勿論……結構なことです」蔡局長は、大変うれしそうな様子を見せた。

だが彼の心の中に、すぐ苦悩が現れた。彼は自分のふがいなさを恨んだ。心は完全に悔恨の念に占拠され、憤怒の情はすでに消え去っていた。

彼は話を切りだす勇気を失って、心の中で呪詛をとなえた。――毛吉め、本当にいやらしい奴だ。わしはもう絶望的だ。くそったれめ。……生涯どんなにわしがおべっかを使っても、警備課長の任命権は指をくわえ見送るしか

ないのか。

悔恨の念が怒濤のように波立ち、彼を打ちすえた。彼は内面の憤怒を心の奥に押し込め、表面は平然を装いながら、一生懸命に酒を飲んだ。嬉しそうな表情を見せるのに全力を傾けた。

この苦しい演技は、会の終了まで続いた。

やりきれない気持ちだが、またまた彼を襲いはじめた。護衛兵のサツサツという歩調が、彼のうしろで鳴っていた。彼は夢の中にさまよいこんだように、わけが分からなくなってしまった。

「どいつもこいつも、みんなわしをバカにして。わしはそんな局長じゃないぞ……」彼は護衛のことを忘れて、歩きながらブツブツ言った。

深夜の道は静まりかえり、一人彼だけが何かつぶやいているのだった。暗い影の下で横になっていた犬が、驚いたようにしつぽを捲いて彼を避けた。

「合言葉は?!」遠くの夜警が叫んだ。

「川!」局長の背後の護衛が答えた。

「県庁舎へ」蔡局長が、酔ってまのびした口調で言った。

「局長! もう十時半です。県庁舎はとつくにからつぽですよ」護衛が言った。

「じゃあ、知事の官舎へ」局長が舌をもつれさせて言った。

護衛はそれに逆らう気はなかった。局長はいらだちを募らせるばかりで、もう今では恐ろしい狂犬のようになっていたからだ。

「山!」官舎の門衛が叫んだ。

「川!」護衛はすぐ近くまできて言った。「蔡局長が穆知事にご面会にまいました」

「どうぞ中に!」門衛は銃を捧げて、最敬礼をした。

蔡局長は顔の前で手をあげ、中に入った。

彼はまず先に建物のほうにちょっと視線を走らせた。木の欄干の隙間から、わずかな明かりがもれ出ていた。風雨にさらされ、朽ち果てたような建物の柱が、不完全にその影を倒立させていた。広い建物は、まるで古刹の廃墟といった雰囲気だった。

彼は体を揺らしながら、長い渡り廊下を伝っていった。二本の鉄線に掛けられた電灯が、遠くの方へずっといくつも伸びていた。彼はだいたい酔いが覚めていた。軽い足音で日本軍の憲兵隊宿舍前を通り過ぎた。

格子窓の隙間からは、明かりがもれていた。穆知事は室内にいた。彼はキセルを置くと、「どうぞ!」と言った。

蔡局長は少しも遠慮せず中に入った。彼は、知事がまったくの「木偶の棒」に過ぎないのを知っていた。局長は黙って座った。

「こんな時間に……いや、まあ一杯どうかね?」

「ウン」蔡局長は傲慢そうにソファに横坐りになった。

「何かご用でも?」知事は物憂げに腰をおろした。そしてゆっくりとあご髭を撫でた。

「用はないが、まあ今月の警務関係の給与のことで」

「それは……萩原参事官がもう……」

「いや、他にわしは言いたいことがある。わしの部下の警備課長に、指導官によって朝鮮人が任命されたんだ。これは大変に重大な問題だろ？ 何かいい考えはないのかね？」

突然、ドタドタと憲兵隊長の池月が入ってきた。

蔡局長はあわてて直立不動の姿勢になった。

「ここで何ば相談しちよる？ こげん深夜に」池月隊長の九州訛の日本語は、ひどく粗暴なものだった。

「ハッ！ 別に……」

「明日来い！ 明日、萩原参事官立ち合いでどげんじゃ？ 今はもう遅か」

「ハッ！」蔡局長は頭をさげた。

穆知事は、両手を垂らしたまま、ぼんやりとそこに立ちつくしていた。彼には、二人の談話が日本語のために分からなかったので、謹んで聞くような態度を示しているだけだった。

蔡局長は軍帽をつかむと、沈みこんだまま外に出た。

「局長はまだわしを見くびっておる。あの狸めが……」知事の声が、かすかに彼の耳に届いた。

頭がくらくらしながら、彼は官舎に戻った。

「あの穆の野郎、ほんとに間抜けな知事だ！」彼は一言報復した。

秋子は毛吉隊長の家へ、またマージャンをしに行っていた。家の中は彼一人だった。門衛が入ってきて、茶をいれると、さっさと出ていった。

「またマージャンか！ 毎日毎日、マージャン！……バカが」  
彼は苦痛の深淵に落ち込んでしまった。笑いかけているようなすみれの花に、彼はぼんやりと目をやった。それをじっと眺めていると、酔った後の充血した目から、血がしたり落ちんばかりであった。

「ああ！ わしも、もう終わりだ。卑怯で、無恥な……くそっ……」彼は、がっくりと頭を垂れた。そして両手で額を支え、紺の色鉛筆でちり紙の上に所在なげに色を塗った。

楽しかった過去の思い出が、よみがえってきた。初恋の時の秋子の姿が、たちまち彼の脳裏に現れてきた。……あの頃、彼は詩人になろうと思っていた。……あれは東京での生活だった。

「ああ！」彼は沈痛な嘆きをもらした。すみれの花を見つめるどんよりとした目は、しだいしだいに朦朧としてきた。彼は目をふせ、すぐ手の中でもてあそんでいた色鉛筆に視線を移した。そして紙の隅に、思いつくまま次のような言葉を書きつけた。

私は一匹の哀れな蚊

何も見つからない

食べられるものが

……

草の葉の上の夜露だけが

飲むことができる



.....

ああつ！ 何と冷たいことか！

この露の珠

私の長い足

寒くて震えがとまらない

「ええいッ」彼はまた長いため息をついたかと思うと、紙を力一杯破り、机の下にパツとまき散らした。そして煙草に火をつけると、ゆっくりと部屋の中を回りはじめた。

やがて、毛吉隊長のテカテカした頭、杉浦局長のずるい目、宮野指導官の冷たい表情が、次々と浮かんで、鉄条網で引っ搔くように、彼の心をズタズタに引き裂いた。

彼は疲れてしまった。目は乾いていた。吸いかけの煙草を捨てると、残り火が完全になくなるまで、軽く足の先でもみ消した。

彼はベッドに伏した。――するとまもなく<sup>いびき</sup>軋をかきはじめた。

周囲はまったく静かだった。門衛がサツサツという足音をたてたり、部屋の隅のこおろぎが時折翼を合わせて鳴くのを除けば。

口の中の唾液が、舌の根元にたまったのか、彼がうつすらと目をあけると、ダラリとよだれが垂れた。そしてベッドからおり、きゆうすをとりあげると、まるで牛が飲むように飲んだ。彼は気分を回復し、やっと目が覚めた。

「チッ！ あいつ、まだ帰ってないのか?! マージャン、マージャン！ 毎日あんなバカバカしいことを。……なんてひどい目にあわれるんだ」彼は憤りに耐えぬふうに時計を見た。……そしてまたベッドの上にひっくり返ると、黙って心の中で繰り返し返した。

「ああつ！ イネハミノルホド、コウベヲタレル（原注――日本語の意味は、成熟した稲ほどもすます頭を垂らす）。わしはこんなふうにして一生を終えるのか？」

## （第12章）

軽便鉄道の発足総会が開会した。

臨時の会場となったH市の中学校では、ふとって鈍重そうな商人たちで一杯だった。あばたの王は最前列の椅子に腰掛け、やっと膝に達するほどの低い机に両手をのせていた。その姿勢は、いつもより一段と彼のがさつで愚鈍な様子を強調しているようだった。彼はまわりをちよつと見回したが、主賓の杉浦局長はまだ来ていなかった。学生たちによつて壊された机や椅子が、部屋の片隅に乱雑に積みあげてあった。

――学生たちは、みんな救国軍に行ってしまった。若い連中は、ほんとに……彼はいたたまれない気持ちになった。彼が、片手で暇そうに机の角を軽く叩いたら、思いがけずに、その安っぽい木の机はぐらつと傾いてしまった。彼は手をひっこめ、椅子の足を支えながら、立ち上がって別のものと具合のよい机や椅子をさがそうと思った。だが、すでに人々がぎっしりと詰め

かけ、通路を阻んでいた。彼はまた坐りなおし、片手を椅子にあてがい、もう一方の手で机の隅をつかんだ。

美女のような眩しい陽光が、隣の机から彼の目の前に移ってきた。彼の机は、真ん中で光が筋になって影に切れ込み、まるで図案の版下のようになった。彼は頭を傾け、入口の方を見た。

こなごなに砕けたガラスの破片が、窓の下の台座に散らばっていた。日差しをさえぎるためのカーテンは、風に吹かれて嬉しそうに舞っていた。割れた黒板が窓の下に置いてあった。

杉浦局長は、凝ったベージュ色の洋服を着て入ってきた。彼は、挨拶をする人々に対して、円錐形の頭を傲慢そうに軽く動かした。そのあと、演壇にむかって歩んだ。

蛙の鳴き声のような拍手がおこった。あばたの王もいかげんに調子をあわせて拍手した。この時、彼の心中に疑問が湧きあがった。——中国人はいたる所で、日本人をたてまつっている。しかもこんなに奴らのご機嫌をとつて……おれには分かん。

「……ハッハッ……ハッハッ」杉浦局長は話を終えるたびに、最後にこうした無遠慮な笑いをつけ加えるのだった。

「……ハッハッ……ハッハッ」聴衆もまた笑った。

笑いはずに止んだ。杉浦局長は続けて言った。「次に、いよいよ本題に入るとします！」彼はその細いずる賢い目で、人々の群れを眺めまわすと、曲げた右手を振りながら言った。「あなた方は、好きなだけ投資でき……商

売もそれによって発展します。あなた方を守ってくれる軍隊も、はなはだ速く輸送されるようになる。要するに軽便鉄道の完成は、とりもなおさず、あなた方の生命を保障することになるのです」彼は、力一杯手を叩き切るように振った。「賢明なる皆さんには、もちろん今度の件に賛成いただけるものと考えておりますが、如何でございましょうか？」彼は、一人一人の商人の顔を眺めた。

人々はみな押し黙ったまま、追い詰められたような顔をたがいに見交わし、杉浦局長の視線を極力避けようとした。あばたの王も目を伏せ、心の中で考えた。——中国語の話し方はまったく立派なものだ。だが、生命も財産も一切適切すべて、怖いのは救国軍じゃなくって、おまえたち日本人だ。……おまえたちは、おれに三ヶ月も家賃をためたままだ。……これがつまりその証拠だ。

杉浦局長は、続いて重々しく言った。「不賛成であるというならば、それは日市の行政を破壊することである。言い換えるならば、満州国を擁護しないことである。擁護せず背くつもりならば、それは当然反対でしょうが。……どうかすく、みなさん方にご返答願いたい」

「賛成！……」瓜皮帽ツギイアキ（六枚の布を縫いあわせた、上につまみのある帽子）をかぶった商人たちが、異口同音に言った。

商工連合会の李会長は、吹き出物のできたその顔をうつむけ、考えていた。そして手に持った杖であばたの王の足にそっと触れた。

「しかたない！」あばたの王は低い声で言った。

たった一人に対して！ あばたの王は自分の顔をちよつとなで、相変わらずうつむいていた。

「それでは、どの方も少なくとも一口、一口金票二百円を抛出することでお願ひ致します。集金の仕事は商工連合会に委託します」杉浦局長は、李会長の赤らんだ顔を見下ろした。「それから凌雲閣の王経理が、事務処理を手伝うことになっています」

あばたの王は微笑みを浮かべた。こうなると自分から金を工面する必要があるのが分かつていたからだ。

「わしに協力してくれるのはうれしいが、とにかく骨の折れるしごとだぞ」李会長に対し、王がちよつと手をあげた。

「それでは、これで散会にします！」杉浦局長が、パナマ帽をとりあげ演壇から降りた。

「軽便鉄道は、どこから作りはじめ、どこまで伸ばすのですか？」李会長が、杖を振って尋ねた。

「さっき言わなかったか？　ここから朝鮮の訓戒までだ。たかだか二十キロの距離だ……」杉浦局長が、出口に向かって歩きながら言った。

「じゃあ、いつから開始ですか？」あばたの王が、近くによって来て尋ねた。

「我々は、仕事には迅速かつ確実だ。おそらく二ヶ月以内にきつと着工できる」

警務局から特に派遣した護衛が、立ったまま敬礼していた。杉浦局長はパ

ナマ帽をとると、そそくさと出ていった。

商店の事業主たちは、ガヤガヤと出てくると、ひそかに協議し始めた。

「まったくひどい仕打ちだ！」一人の太った円筒形の体つきの男が言った。

「吉林に電報を打って、財産をみんなあっちへ移したほうがましだ」別の人間が言った。

「あばたの王！　おまえはどうするつもりだ？」太った男が彼の側へ来て言った。

「おれか？　おれは、どうもこうもあるもんか！　せいぜい頑張つて、何日か勤労奉仕をするまでさ」彼は、あばた面の上に真面目な表情見せた。

「こんな時期に、誰が二百元も出す余裕があるんだ？　まったくやつかいな事になった」李会長が顔を歪めた。

「しかし……どうやつても、日本のえらいさんがあだと言えば、わしらはそれに従うしかない」太っちよが瓜皮帽をちよつと直してから言った。

「こんな時期に、金があっても生きてゆけないのに、なけりやあ、言うまでもない。――よしっ！　みんな店でちよつとどうだ？」李会長は杖を振りあげた。

「やめとこう！　明日商工会であおう！」あばたの王がうなづいた。

「会であおう！　会で」

彼は李会長の後ろ姿を見ながら思った。――金があっても生きてゆけない。なけりやもちろん、生きられない。おれは、なんとしても生きねばなら

ない。……他の学生や若い連中は、……劉強のような子供は、生きてゆけるかどうか分らない。

凌雲閣に戻った時、彼は顔一杯に珠の汗を浮かべていた。

板のベッドの上には、一人お客が横になっていて、老常ラオチャンが接待していた。

「ああ！ 孫検査官ソン、おいででしたか」あばたの王は笑顔を作りながら言った。だが心の中では、こいつが来たのはアヘンの課税で、金を落とすに來たのじゃない、と考えていた。

「何をしに行つてたんだい？ あばたの王よ」孫検査官が口から濃い煙を吐き出した。

「会合がありましたんで。鉄道を作らなくちゃいけないとか」

「知ってるよ。おまえ、どれぐらい出資するんだい？」

「あれば出しますが、わたしらの商売は、芙蓉楼なんかと比べものになりませんから」あばたの王は、孫検査官の足下に来て、斜めに坐った。

「おまえはまだ貸家があるんだろ？」孫検査官がキセルを取り出し、鼻声で言った。

「貸家？ あれは、杉浦から三ヶ月も払ってもらつてませんよ。それどころか、わたしが数日前に役所に訴えられた時……やっと釈放されたのも杉浦のおかげで。来年あたり、また奴にお礼をしなくちゃ」

室内には静けさが戻り、ただアヘンを吸うスースーという音だけが鳴っていた。

あばたの王は、この前の杉浦局長との会話を思い出した。「——日本はいま非常時だ！ 家賃が入って来ないからといって、飯も食べられないなどと泣き言をいうな。……大体、国の税金が重過ぎるんだ。一ヶ月後にもう一度来い！」そして、あばたの王は自分を慰めて言った。「杉浦はそれほど悪い人間ではない。月末毎に百八十元払うことになった。彼はこちらが困っているのを知っている」

「それじゃ、なぜ劉大人に借金しない？」孫検査官が尋ねた。

「劉大人は死にました！ あーあつ！」彼は感傷的に言った。

「死んだ？ おれは少しも知らなかったぞ」孫は驚いた。彼は、慣れた手つきでアヘン用の長い針の先に、王のため煙泡をつけてやった。

「長い間親友だったのに！……」あばたの王は、昔の生活を回顧して言った。

「彼は地主だろ。黒頂子山にずいぶん多くの土地を持っていなかったか？」

「その土地のために死んだのです。息子は連れ去られ、土地は取り上げられ……わたしも家を売り払おうかと、考えているんです。もし買いたい人がいれば、お手数ですが、ちよつと見に来るように話してもらえませんか？」あばたの王はしゃべりながら、じつと淡い煙灯の火を見つめた。

「こんな時世に家を売りたいだなんて！ よほどの間抜けだなつ」孫検査官は体をよじつて、あばたの王の耳もとで低くつぶやいた。「中央で我が軍が反撃する時まで待ったらどうだ。やっぱり、ここはおれたちの土地だ」

ろ？」

「ふふっ……」あばたの王は、親しげに孫の足を叩いた。「そうですね。わたしも『日』（暗に日本を指す）の落ちるのを待ちましようか」

（第13章）

焼けるような日差しが、平坦な原野いっぱいに降り注いでいた。包米<sup>とうもろこし</sup>はもう色づいた髭を伸ばし、大豆もほころび開いていた。ただこれらの間で、老博代<sup>ラオボダイ</sup>——原注・吉林省東部の国境地帯で苦力<sup>ククリ</sup>を言う。もともとはロシア語に由来する——たちは、完成に近づきつつあった鉄道の建設に追われていた。

臨時監督のあばたの王は、改修された道に沿って、左右に目を配りながらゆったりと歩き、忙しく働いている作業員たちを見て回った。

彼らが粗野な言葉で話しているのは、みんな自分たちがどのように延吉から応募してきたかという事情だった。そして時々バカ笑いがまき起こっていた。

「しっかり働け！」資材局からきた助っ人の監督である洪<sup>ホン</sup>は、ぶつぶつ呟きながら、しょっちゅう誰かを籐の笞で叩いていた。

「洪さんよ！ そんなにビシビシやっちゃいけませんよ。子供にも分かる道理ですぜ」あばたの王は時々注意した。

しかしこの同僚は、機械のように無表情で歩き去り、頭をピクリとも動かさなかった。

——あいつめ！

後ろで彼の背中を眺めながら、あばたの王は低い声で呪った。

鉛色の顔付きをした老張<sup>ラオチャン</sup>が、鉄の鍬を持って側の土を掘っていた。彼のむきだしの腕は、頑健そのものに見えた。野性的なまでの背骨は、体が上下するたびに震え、汗が泥や埃<sup>はり</sup>といっしょになって、背中の溝をしたたり落ちていった。

上半身を裸にした二人の人夫が、からっぱの柳行李をかついでくると、老張が土をすくってその中へ入れ、行李がすぐに泥土でいっぱいになった。すると二人の人夫はかついで、窪地に向かうのであった。土堀り役の老張は暇になり腰をおろした。彼の両目は、洪監督を警戒していた。

「疲れただろう」あばたの王が振り返って言った。

「へえ……大丈夫です」老張は恥ずかしそうに鍬をひき寄せた。しかし、彼は土を掘らなかつた。からの行李が来ない時は、ただスコップの先で固い土塊を砕いているだけだった。

この時、洪監督が狡い狐のように背後から巡視にきた。

「しっかり働かんかい！」彼は、老張のまっすぐ伸びた背骨の上に、不意に一撃を加えた。

あばたの王はぎょろりと目を向け、心の中で憤っていた。しかし、洪監督は傲然と籐の笞を振りながら歩き去っていった。

「おい！ おまえ、山東の萊州府の出じゃないか？」あばたの王は優しい口調で老張に尋ね、相手の言葉の訛を聞き分けようとした。

「ええそのとおりです。監督さんはここにいたから、わしが怠けてたんじゃないことを知っておられるでしょ。——くそつたれめが」老張は、手を背中の方に曲げ、赤くなった筋を撫でた。

「満洲で一旗あげるっていうのは、大変なことだ。ここ何年も朝鮮の連中はおれたちをあごで使ってきたが、これからもう時代が変わってゆくんだ」あばたの王は、感傷的な表情を浮かべた。

「くそつたれめ。ほんとに銭をかせぐのは大変だ。気違い旦那のお叱りをまた受けたわい」老張は再び泥土をさらえはじめた。

珠のような汗が、彼の額から流れだし、汚れた頬を伝い落ち、地肌をくつきりとあらわにした。むきだしの肩や腕も、まるでコールドールを塗ったように、汗でびっしりとなった。頭の上からは、薄汚れた蒸気がもうもうと立ち昇っていた。

あばたの王は黙って、彼の骨格を審査するように、あるいは彼の労働力を測定するように、男を眺めていた。

「老張！　なんでおまえはこの仕事を選んだんだい？……こんなにひどい目にあいながら」彼はついにこう質問した。

「家には米も味噌もないんで。働かなければ、どうやっておまんまを食べていくんです？」彼は不思議な顔つきで反論した。

「おまえたちは捨てきれないものがないから、まったくの裸一貫でも……あばたの王は男に近づいた。

「なにか他にできなかったのか？　たとえば……山へ逃げるとか」

「あんたさんたちのような金持ちこそ、家に食べるもの飲むものがなければ、どうして山へ逃げないんですかい？　わたしもお袋がないなら、とつくに山へ逃げてましたよ」彼は土を掘るのを止め、腕で顔の汗をぬぐった。

「おれたちは家も土地もある。こんないやな仕事などしたくないが、かといって家や土地をむぎむぎ取り上げられ、山へ逃げてゆくこともできないのだ」あばたの王は恥ずかしそうに、照れ笑いをした。

そして彼は一つの木陰に腰をおろし、心の中で自分の将来を考えてみた。遠くの空に顔を向けながら。

山と空との境界線には、ちぎれたような綿雲が軽々と舞いあがり、山の頂きの向こう側へと次々に流れていった。家々や田畑の間にまだらに落ちていく日の影は、雲の移動とともに徐々にうつろっていった。

——金のあるやつは、財産が惜しい。金のないやつは、おまんまがほしい。中国人はどう転んでも、うだつがあがらないのか……。彼はウチワであおぎながら、自分に問いかけた。

彼の目の前に伸びている高梁は、もうすでに人の頭ほどの高さになっていた。細長い葉が、そよそよとたなびいていた。その鮮やかな緑色の中に、一筋の赤い線がまじっていた。蒼蠅と甲虫が、葉っぱの裏側で跳びはねては、時々しばしの休息をとって潜んでいた。した。

「しっかりと働けよ！」洪監督が、籐の笞を振りながらまたやって来た。

「休みなさいよ」あばたの王が腰を動かした。

「すまん」洪が近づいて彼の側に坐った。

そして茶色の眼鏡をはずすと、制服の端で拭きながら言った。

「中国人は、まったく怠けもの狗同然だ」

「狗は狗でも、天狗だよ。天狗はお『日』さまを食べるというからな」あばたの王は茶化して言った。

「ほんとに、狗だ」

このやりとりは、あばたの王にとって愉快なものだった。彼は自分の含みのある言い回しが、他人に真面目に受け取られたことに得意だった。彼はもうそれ以上言うつもりはなかった。それに朝鮮語を知らなかった。二人は憂鬱そうに顔を合わせていたかと思うと、意味もなくちよつと笑い、また時には互いにのしりあっているようにも見えた。洪監督が絶えず籐の笞を動かしていたため、地面の草はむしりとられ、根っこが露出してしまった部分もあった。

突然、洪がガバツとおきあがるや、何か大変なことを発見したというように、背中をまっすぐ伸ばしていた楊慶の方へ走っていった。

「パシッ！パシッ！」例のごとく二発笞をくれると、洪は一言も発せず前方へ去っていった。

背に笞を受けた楊慶は、その無骨な腰を慌ててかがめ、土を掘りはじめた。

「亡国奴め！」洪の方を見ずに、楊慶は罵倒した。

「働こう！ つかあいつらをやりこめてやる」老張が鍬の柄にもたれて

言った。

彼らの背後には黄土色の砂と土の層が、固く張りついたように伸びていた。それはまるで暗い濁った河が、高粱畑に沿って流れているような風景だった。

人々の群れは、やつとのことで線路を運びあげ、次の日の夕方には、軌道を敷く作業も終わった。

「カン……カン……」いたるところで金槌の音が響いていた。

整理された枕木が、梯子のように長く伸びていた。きのこ状の釘が、軌道に沿ってあちこちに集散していた。監督の洪は、相変わらず行ったり来たり巡察しながら、ぶつくさ言った。

「釘を盗むなよ。さっさと仕事をするんだ」

「あの野郎とも終わりだ」線路をかついでいた男が、歩きながら言った。

「純白の銀貨が、もうすぐ手に入るんだ」楊慶がにつこりと笑って言った。「老張、山東の家へどれくらい送金するつもりだい？」

「どうやっても三、四十元までだな」老張は、軌道の台座に釘を打ちながら言った。

「おれも三十元しか送金できん」

「終わりだ……みんな、もういいぞ」あばたの王は彼らを慰めた。

しかし慰めながらも、あばたの王の心中は、むしろ憂鬱で一杯だった。彼は眉をキツと顰め、八の字の形を作った。彼はみんなに、杉浦局長から聞いた知らせを話そうかと思った。しかし、連中の無謀さを考えると、逆に大変

な事態を招くかも知れないのをおそれた。

——みんな中国人なんだ。みんな同郷人なんだ。おれは指をくわえて見て  
いることは、絶対できない。彼らは毎日太陽の下で毛虫のように焼かれ、必  
死にもがいて力仕事に耐えている。そして結局は日本人に騙されるのだ……  
。彼はついに心を決めた。

「老張！——おい！ 老張」彼はもぐもぐと言った。「教えてやろうか。

——たぶん、賃金は支払われないぜ……」

「なんだって？」老張はひったくるように言った。「なんて言った？ あ  
ばたさん」

その呼び方は、彼の氣に入った。そういえば、長いこと彼は「あばた」と  
いう呼び掛けを耳にしていなかった。彼は老張に近づいて言った。

「おれはちよつとニュースを耳に挟んだんだ。賃金は列車が通ってからで  
ないと、もらえない」

「じゃ、おれたちはただ働きをさせられたのか？」老張は本気にせず、ば  
かばかしいといった様子でまた金槌をふるいあげた。

「ほんとなんだよ！」誠意を浮かべたあばたの顔が、彼を見つめていた。

「どうしても払ってくれないなら、腕づくでとるまでよ！」

あばたの王は、顔に屈辱的な火照りを感じた。彼は老張を一瞥すると、何  
の未練もなく立ち去った。

——あのみじめな連中のことを心配してやっているのに、おれが何かピン  
ハネでもするというのか？……彼は考えた。

澄みきった夜空にまばらに散った星たちは、互いに微かな光を放射しあっ  
ていた。微風が涼氣を送りこみ、秋の到来を予告していた。包米の葉、高  
梁の葉、……それらすべてが、まるで人目を忍ぶ恋人たちの囁きにも似て、  
サラサラとうつとりするような音を立てていた。大豆やその他の穀類が、お  
だやかな穂先を波打たせていた。

あばたの王は、白い月の光を踏みながら、人々の群れの最後から黙って  
くつついていった。足下の軌道は、まっすぐ遠い先まで延び、まるで二匹の  
巨大なウワバミが火のような怒りを発して進んでいるように見えた。

——今年の景気がどんなぐあいに変わるのか分からないが、日市に鉄道は  
敷設された。……彼は感慨深い様子で思い返した。歩みを落とすと、杉浦資  
材局長の所へ近づいていった。

杉浦局長は、和服の丹前を着込み、手を腰の黒い帯に差し入っていた。慣  
れた様子で筵のうえに坐り、至極のんびりとしていた。

「杉浦先生、今月の家賃をどうか払ってくださいませんか」あばたの王は  
控え目に言った。

「家賃のことは言うな。飯代さえもここに持っていないんだ。まあ坐って、  
世間話でもどうだ？」杉浦は手を暖炉へ伸ばして、中の灰を掻きまわした。

あばたの王は、茫然と彼を眺めていた。

「おれたちは親友だろ。五、六年来の親友だろ」杉浦は感情を込めて言っ  
た。「おまえが官憲に捕まった時でも、おれが牢屋からおまえを出してやつ  
たんだ。親友じゃなければ、誰がそんなやつかいなことをする？ そうだ



ろ?……手配師の李は、黒頂子山を占拠して土匪に鞍替えた。おかげでこっちは今年の山林の収穫はゼロだ。そのうえ、わが国の軍事費の負担は、こんなに重くなっている。今月の慰労金も、わしが鉄道建設資金の一部から借りているほどなんだ……」

あばたの王の顔は、暗紫色から真っ赤になった。彼はもうこの聞き慣れた言い訳に、これ以上耳を傾けたくないと思った。彼は、心の中の激しい憤りを抑えて、ゆっくりとおだやかに言った。

「三ヶ月も家賃を納めてもらってません。杉浦先生もわたしが苦しくつて、米もツケで買っているのはご存じでしょう?」

彼は、杉浦がギョロリと目を見開くかも知れないと、内心おそれたが、幸いにもこの時の杉浦は、いつもどおり慈善家の老婦人のように、目を細めていた。——彼は温和な口調で言った。

「急がんでもいい。そのうちにおれが何か手立てを考えておく」

「本当にそのままとすることは、ないでしょうね?」あばたの王の顔には、懇願の表情があらわになった。彼の目は杉浦を避け、オンドルの机の下で眠っている猫の方に注がれていた。

「鉄道工事の賃金さえ、全部支給できないのだ。そのことは今言っただろ。まして家賃なんか払えるはずがあるまい」

あばたの王は突然大胆に言い放った。「じゃあ、あんた出ていってくれ。

わしは家を貸して食ってるんだ」

「何だって?」杉浦はうろたえて、その細い目を真ん丸にした。「出てけ

とは何という言い草だ! おまえのその態度、すぐに牢屋に送って、こらしめてやる。知ってるだろ、警務局長はおれが保証人なんだ。おまえを奴の所へ送る力ぐらい、わしにあるんだ。家賃が……払ってないぐらいで、ぶつぶつ言いやがって……」

あばたの王はあわてた。彼のぼんやりした目の前で、爆発が起きて火花が散ったような状態だった。心の中は怒りで煮えくり返っていたが、相手の大きく見開いた目の光に射すくめられてしまった。次の瞬間、杉浦が手を振って言った。

「出て行け! もう二度と勝手にここに来ることは許さん。……五、六年来わしがおまえに払ってきた家賃は、あの家の値打ちの三倍以上はある……それがおまえはまだ分かんのか?」

「ああ……酔っぱらっていたものですから……」あばたの王は、ついに笑顔であやまった。「わたしの話はあなたの気にさわったようですが……どうか……聞き流してください……じゃあ!」彼は足を震わせながら、外に出た。

——おまえはまだ分らんのか、家賃はもう三倍以上払った……。

彼は、杉浦のこの言葉の奥の意味を、繰り返し咀嚼した。

#### (第14章)

鉄道の線路の側にある旧女子小学校の建物が、鉄道局の臨時の警備事務所となった。破れて傾いた正面の門に、ペンキの真新しい看板が掛かっている。

た。

荒れ果てて久しい教室は、うつ伏した野獣の脱け殻のように、冷え冷えとした空間を生み出していた。人々がこの中に集まっていたが、ただあばたの王の顔だけは見えなかった。

杉浦局長は両手で机の端を押さえ、まるで褓ひきかえるの円い腹のように、胸を前にそらせていた。そして話をする前のいつものくせで、白い歯で下唇を噛みしめていた。頭がわずかに揺れていた。

「この鉄道会社の新規採用は、入社試験で決めるのが最もよい」彼は傲慢そうに言って、ずるい目をしばたせ、みんなの同意を求めた。

「なるほど。わたしにも、北平ペイピン（北京ペキンの改称）で勉強している知人が一人いるが……」李会長が笑いを浮かべながら言った。しかし、杉浦はすぐ彼の言葉をさえぎった。「ここでは朝鮮人を職員に採用すべきだ。彼らは生活も苦しいし、それに日本語ができるからね」

「しかし、満洲人がいなくて、なにかと不便ではないでしょうか」李会長が黒味がかった赤ら顔を仰向けて、おどおどしながら抗議した。

「たしかにそうだ。何人か満洲人を使えば、旅客の面になにかと便利だ」一人の髭の少し白くなった紳士が言った。

「これにはちよつと事情がありまして……みなさんのご心配には及びません」杉浦はおだやかな口調で続けた。「満洲人は絶対に誰も採用しません。とくに北平から戻ってくるような学生は、おおかた駄目です」

彼は相変わらず胸を張り、両腕を鉄柱のようにして身体全体を支えてい

た。

李会長は、先ほどの白髪フーシヨウの紳士を斜めに見、そのあと番頭の福陞フクセイの方へ謎をかけるように目くばせをした。

「我々が今日議論すべき問題は、駅舎の建築に関してで……」杉浦局長がまた発言しはじめたが、すぐに止め、頭をかしげた。……ザワ……ザワ……驚くほどの人の群れが、突然正門から中に溢れ入ってきた。

「おれたちに賃金をよこせ！ 中国人苦力クイリをばかにするなよ！」老張が真つ先に口をきった。

「自分たちは仕事せず、答でおれらを叩くばかり。仕事が終わっても金はくれん。おれらが片をつけてやろうか？……くそったれめが！」楊慶が、殴りかかってくるのを待ち構えるように、つつ立ったまま、あわせの袖をまくった。

「人でなしをやっつけろ！」

「やれ！……中へ入れ！……」

人々は海鳴りのように咆哮した。ついに火薬庫が爆発したのだ！ どの人間の落ちくぼんだ目にも、みな危険な怒りの色がみなぎっていた。ぐつぐつ煮えたぎったような音が飛び交い、わめき声がやがて一丸となって押し寄せた。

屋内の人々には、たちまち混乱がまきおこった。驚きに引きつった顔が、あちこちで揺れ動いていた。しかし杉浦局長だけは、悠然として歩きだした。彼の口の端には、妙に冷めた笑いが浮かんでいた。目はいつものように

細く開けたままだった。

「騒ぐな！」彼は落ち着いた口調で言った。「こんなことをすると、おまへたちは豚箱行きだぞ。分かっているだろう。今は非常時なんだ。もしこれ以上騒ぐなら、かならず特務機関か憲兵隊に引き渡す」それから、彼は断固たる口調で言った。「分かったか？　ばけなすどもが！」

烈火が冷水を浴びせられたように、人々の声は静まった。ただどの人間の目にも、抑えきれない怒りがくすぶっていた。

「賃金はもちろん払う。しかし今はだめだ。十分の三はすでに支給してあるから、それで充分のはずだ。……あとは列車が通ってからの話だ！」彼は曖昧に話を結ぶと、身をひるがえし、教室から出ようとした。

老張は小さくなって仲間の人夫たちを眺めた。筋肉隆々たる腕が、少し下に垂れた。だが分厚く広い胸は、不満そうに波打っていた。

「それじゃあ、残りの賃金は、開通したらきつとくれるんだな？」楊慶が虚勢を張りながら、袖をまくって言った。

「絶対とは言えんが……わしがおまへたちを集めた時は、本当は一日三十銭の工賃のはずだったが、あばたの王が、おまへたちからピンハネしたんだ」杉浦は不敵な笑いを浮かべて、教室を出た。

「あいつ、あばたの王に転嫁しやがった」李会長は、番頭の福陞昶に目くばせを送った。

「しかし会長、がんばって下さいな！　駅の職員は満洲人を使ってもらわないと」番頭の福陞昶は低い声で言った。

「……我々が鉄道建設に金を出したのに、朝鮮の連中に横取りされたんじゃないあ……出資者をコケにしている。李会長、あなたは我々出資者たちを代表して言うべきだ」白髪の紳士が、そっと李会長の近くまで来て言った。

「彼がひとりで取り仕切っているのだ。どうして我々の話す余地があるのか？」李会長はぼんやり窓の外を見た。

ワイワイとまるで蝗<sup>いせ</sup>の集団のように、人々は互いにしばらくの間しゃべっていたが、やがて正面の出口へと押しかけた。

「くそつたれめ……一ヶ月以上山東へは送金してないのに」老張は列の前でがつくりしながら言った。

夜風がじつとりした湿気を運びながら、老張の身体に吹き寄せ、このほか冷たく感じられた。

太陽はすっかり西に隠れ、西方の空は一面赤い霞がかかっていた。地表に近いところは、琥珀色が空の紺色によく映えていた。遠い雲のところには、紺色の線がかかり、この上なくあでやかであった。

老張は仲間たちと一緒に、鬱々としながら凌雲閣へ足を向けた。

あばたの王は、暗紫色の顔を苦悩で歪めながら、連中が次々と先を争って訴えかけるのを聞き、彼らに頭を下げた。苛立ちと憤怒が一緒になって、錐のように彼の心を刺した。自分をぐるりと取り囲んでいる群衆を見て、彼は喉が急にむず痒くなり、口の中の唾を吐くと、両目からゆっくりと涙が潤んできた。

——この烟館も、もう潰れるしかない。金のある人間でも生きてゆけな

い。金のない奴はなおさらだ。……おれは生きねばならん。この苦力たちも、だ。……杉浦……。

彼はもうこれ以上考えなかった。一度唾を吐くと、不意にまわりの連中を見て言った。

「あんたたち！ 一つだけ手がある。山へ逃げれば、活路を見出せる。……もし生きたいと思うなら、まずおれたちの土地を奪い返すんだ」

「そうだ。俺は前から山へ行こうと思っていたんだ」楊慶が横から口を出した。

「どのみち、ここには野垂れ死ににきまっている。山へ行つて、おまんまにありついた方がいい」別の破れたシャツをひっかけた男が賛成した。

「……もつと声を小さく……」誰だか知らないが、声はさんだ。

彼らは一度声を潜めて耳を澄ませた。どの心もみな、ひそかに躍動していた。顔には厳粛な表情が現れ、目には興奮の色が溢れていた。その中の何人かの目は、今にも血が流れてそうなほど赤かった。きつく力をこめて拳骨を握りしめ、荒々しい筋肉が、その輪郭を盛りあげていた。

「おれは家も財産も捨てねばならん」あばたの王は低い声で言った。「今晚が、つまりおれたちの夜逃げつてわけだ。黒頂子山へ行けば、そこには友達がいる」

「故郷の家にはまだお袋がいる。おれが送金して養つてやらねばならんのだが」老張が祈るような眼差しで、あばたの王の鼻先を凝視した。

「みんな！」あばたの王は、チラッと彼の方にまばたきして言った。「故

郷に飢えた妻子が待つてなけりや、誰も満洲へ出稼ぎになんぞ来やしない……知らないだろうが、関内の中国軍はいま進撃しようとしている。今年はつまり『日』の沈む時なのだ。早くもチャンス到来なんだ……どのみち、金ももらえない鉄道の半端仕事なんか、いつまでもできないぜ」あばたの王の唾が、話す毎に老張の顔の上に飛び散った。

「一年以上たつても、満洲まで進撃して来なかったら？」老張が真妙な顔つきで、ポカンとしながら彼を仰ぎ見た。

「今年はきつと進撃してくること、請け合いだ。おれたちが日本軍の退路を断ち、鉄道を分断すれば……そうすりや、みんな平和に飯が食えるようになる。そう、五ヶ月もかからずに日本軍は完敗だ」あばたの王は、興奮してきっぱりと言った。

「そうだ。家にしばらくはいることはない。両目でしっかり満洲国の滅亡を見てやる」楊慶が、老張など相手にしないといった様子で言った。「もうこれ以上の苦労は御免だ……おまえは、あいつらの刀が首筋に当たっていないが、自分の死後に血を残しておつかさんに飲ませてあげてくれと、連中に哀願するつていうのか?！」

老張はゆっくりと頭を垂れ、沈黙した。

結局この日の真夜中、彼は大勢の人々に従つて、汚濁にまみれた日市をこつそりと離れ、期待に満ちた黒頂子山へと走つていった。路上に蔓延している植物と尖った小石が、彼らの手足にからみついては刺した。しかし、彼らはすべてを振り捨てて歩いた！ 歩いた！——彼らの希望したあの大地へ

と歩いた！

ぼんやりした月明かりの下で、まるで装甲車が黒々とした煙をずっと吐き続けているように、隊列が延々と伸びていた。田んぼの秋の虫が、彼らのために歌を吟じていた。チーチー！ チーチー！

（上篇完了）

（昭和六十二年五月七日受理）